

青年海外協力隊の月刊誌・JOCV Monthly Magazine

クロスロード 9

crossroads 2002



写真は森川薫さん(インドネシア・婦人子供服・13/2・兵庫)

OBの暮らし方探訪5人の場合特集
インドネシア・バル地域
プロジェクト総括座談会



天然塩
関鉄弥さん
(ホリビア・工作機械・4/2)



炭焼き
矢島亮一さん
(ハナマ・村落開発普及員・10/3)



炭焼き
新井圭介さん
(ハナマ・稲作・10/2)

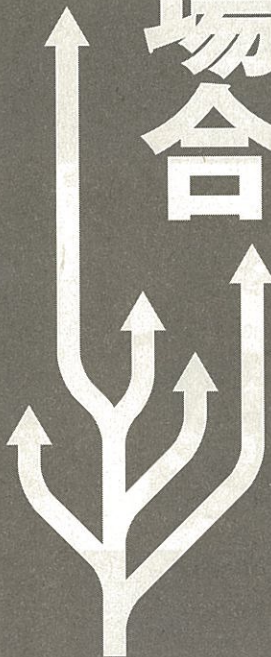


ロッジ経営
川尻耕治さん
(モルディブ・野菜・1/3)



カイロプラクティック
小玉弘さん
(ルワンダ・医学・61/3)

帰国後も協力隊的 生き方は可能か。 5人の場合



最近の帰国隊員に進路希望を聞くと、教師、公務員、国際関係の仕事と答える人が多くなってきている。いずれもが確かに協力隊経験が重視される分野である。しかし少々安定指向すぎるのではなからうか。今回は協力隊体験が「今」に導いたという5人の生き方を紹介したい。特段気負うでもなく、踏み出した自分らしい暮らし。ただ、苦勞がないわけではない。しかし、彼らの存在が周囲の人々にもたらす影響の大きさはまさに協力隊の日本版。彼らのように生きたいと考える人に、ちょっとヒントになれば幸いである。

群馬県高崎市

青年海外協力隊に参加したふたりの男が夢を語り、
夢を追いつづける

今、人気上昇中の炭焼きに 挑戦する。パナマOB

師匠は、元農水大臣賞受賞
のアイデア満載マン

本誌の特集テーマは「帰国後も協力隊の生き方は可能か」を探ること。どういう生き方がそれかはそれぞれに任せるとして、候補者を関係者に推薦してもらっていたところ、群馬

県のOB会会長・矢島亮一さん(37歳・パナマ・村落開発普及員・10/3)と副会長の新井圭介さん(28歳・パナマ・稲作・10/2)は、将来炭焼きも含む自然体験学校で生計を立てようとしているユニーク二人組との情報が。そこで彼らの話を聞きに二人の故郷でもある群馬へ出向いた。

どうですか、山林にすつくと立つ下の写真の3人。やはり、日本にあっても野に置け協力隊だなどと、シャッターを切り

ながら、妙に納得したものである。ここが炭焼きの現場なのだ、なんとここは上信越自動車道吉井インターのほど近く、間近に住宅もある山林なのだ。よほどの山中でもなければ炭焼きなどできないものと思いついていたので、あつげに取られてしまった。

これは、二人が「師匠」と呼んで炭焼きを学んでいる、折茂清一さんの私有地だからこそ可能なことだった。折茂さん、70歳だとか。まさかというほど若く見えますよね。

炭焼きは木酢液ブーム、あるいは足裏健康法などもあって、流行の兆しを見せ始めているが、やりたいと思っても、そうは簡単に始められるものではない。師匠の折茂さんは1976年、養豚界に高床式豚舎で革命をもたらしたとし



炭焼きの現場で 左から新井圭介さん、矢島亮一さん、そして師匠の折茂清一さん



高崎市立新高尾小学校における「総合的学習の時間」で。子どもたちと同じ目線に座って授業を展開する矢島さんと新井さん。この日の授業は「水」について。子どもたちからは「パナマと日本のミネラルウォーターではどちらが値段が高いか」「日本の川とパナマの川に住んでいる生物の数はどちらが多いか」など水に関する質問が飛び交った

「総合的学習の時間」の第一回目とのこと。それにしても4年生恐るべし。アフガニスタンで起こったこともそれなりに知っているらしいし、酸性雨の問題や森林効果も観念的には理解している。物知りになるためだけでなく、知る喜びをいかに育むか、二人の挑戦はこれからだ。しかし、夢に生きると現金

自然塾とは？(趣意書から引用)

現代人は誰もが「自然は大好き！」と答えます。その自然とはどんなイメージなのでしょう。自然の中で育まれてきたく原体験を持たない世代が大半を占めてきた現在、自然は映像やイメージの中で語られることが多くなってきました。皮膚感覚や匂いを伴わないイメージだけの自然。自然が好きならばばかりなのに、実際は、人間と自然は離れる一方です…。何かおかしい。

人間は自然界なしには生きられないし、身近に様々な自然を感じ続けることが子どもからお年寄りまで共通した必須の栄養なのではないでしょうか。自然を知るためには本物の自然と体中で出会うことが必要です。それも人間の一方的な気紛れで付き合うのではなく自然に十分配慮した方法で。そのために《自然塾》がお手伝いをするのです。

伝統的な日本文化をもう一度見つめ直す！ それを伝えたくて…。青年海外協力隊に参加したふたりの男が夢を語り夢を追いつづける、世界の子どもたちに力強く生きてもらいたくて…。



連絡先や問い合わせは、すべて自然塾まで。

連絡先
TEL & FAX :
027-362-6572
027-463-4081

がんばれ！
自然塾・寺子屋

彼らが目下成功させたいのは昨年5月に設立した「自然塾・寺子屋」。対象は小中高校生から家族。とにかく野菜栽培、収穫等々、炭焼きを通して自然と向き合う学びの場を提供したいと思っている。学校への出前授業は好評で、すでに回を重ねている。

この日は矢島さんの母校でもある高崎市立新高尾小学校へ。4年生83名に向けての「総合的学習の時間」の第一回目とのこと。

に「人間らしい」生き方を体得、自分たちの故郷でもこれを貫くために、2000年、二人は相次いで帰国した。



ミニチュアの炭俵を手で編む新井さんと指導する神宮佑次郎。神宮さんは折茂さんと養豚も共にした長い付き合いの相棒である

て農林水産大臣賞を受賞したことがある。「創意工夫のファーマー」。悠々自適の境遇ながら、かつて養蚕と共に盛んだった炭焼きを後世に残したいと、自力で7年前に取り組み出したという。

矢島OBは折茂さんの息子さんと高校が同級であった縁で、新井さん共々弟子入りした。1年半前のことになる。師匠もがぜん活気づいたそうだ。教えなければならぬことが山ほどあり、何しろ打

ては響くような青年2名は、やる気に満ちていたからだ。そして師匠の相棒・神宮佑次郎は、炭俵のミニチュアを新井さんに伝授中。人気の品となってきたいて、結構忙しいとのことだった。

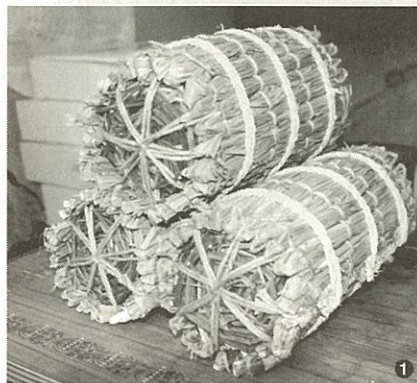
二人は窯造りもマスター、「尾瀬高原ホテル」には彼らによる炭焼き窯が稼働を始めている。炭焼きはロマンなのかかもしれない。これで食べていけるようになるのには時間がかかるからだ。しかしOB2名は、「わがふるさとにこんな素晴らしい人たちがいたとは」と、毎日が楽しくてならないという。

「人間らしい」
生き方をしたい、
これが二人の願い

矢島さんと新井さんの出会いは、もちろん派遣国パナマでのこと。配属先は異なったが、同じ群馬県の出身だというので、帰国したら二人で協力しあって、納得のいく暮らし方、つまり「人間らしい生き方」を実現しようとした。合っていたのだそう。

新井さんは、子どものころからの山好き。長じては国内外の山に登ったり、釣りをしたりの「野外遊び」の達人。その後「米作り」にはまりパナマへ隊員として飛び立ったという若いながらも百姓魂の持ち主。さて矢島さんの協力隊以前の経歴は、多彩。

大学卒業後の1988年、23歳でカナダへ。とにかく日本を出たかったのだそう。たまたま行われていたカルガリー・オリンピックで見たアルベルト・トンバのスキーに圧倒され、スキーに賭けてみることに。バンフ国立公園のスキー場にあるビレッジに住み込み、スキーの修行をした。1990年、26歳で帰国。ホテルマンを経て、30歳で再びカナダで仕事をし、34歳で帰国。ボランティア活動に励むうちに協力隊と出会い、パナマに向かったのだ。パナマで、二人は「貧困」を目の当たりにしたが、豊かな日本で感じてきた閉塞感や居場所のなさによる苦痛からは、完全に解放されたという。人情味豊かな地域での暮らし



- ① 炭俵(販売価格) : 1個1800円
3個5000円
- ② 布袋入りは、浴槽用で1000円
手前左は備長炭に近い高級炭
500円、右は竹炭500円
- ③ 木酢液1本1リットル800円